

ラツィオ地方北部トウスカニアのサン・ピエトロ旧司教座聖堂は、内陣周辺に 11 世紀末の制作とみなされるモニュメンタルな壁画を有する。アプシスは 3 区画から成る。アプシスの大部分を占める上部区画には、巨大な正面観のキリストの立像、飛翔する 8 人の天使、下方から天を見上げる十二使徒が表される。下部区画には、11 世紀後半の司教座の両側に聖人のメダイオンが 6 つ並び、最下部区画には、装飾の施された跡が残る。1971 年 2 月の地震により、同聖堂のアプシスとファサードのバラ窓が崩壊し、大部分が剥落したアプシスは漆喰で埋められた。

トウスカニアのアプシスは、正面観のキリスト立像、天使、十二使徒に加え、「キリスト昇天」に言及する銘文「ガリラヤの人たちなぜ天を見上げて立っているのか」(使徒 1:11) を 1 人の天使が掲げることから、ビザンティン美術で普及した「昇天」のヴァリエーションとみなされてきた。ラツィオ地方において、「昇天」は 13 世紀のローマのサン・バジリオ・ネル・フォーロ・アウグスト聖堂とトウスカニアのサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂を除くと、アプシスに描かれておらず、類例がみられない。くわえて、サン・ピエトロ旧司教座聖堂には、巨大なキリスト、キリストの掲げる球体と冊子本、8 人の天使、十二使徒の巻物や冊子本、背景の樹木、画中の銘文、聖母の不在が認められ、伝統的な「昇天」図像から逸脱する。

先行研究は、アプシスを「昇天」ととらえ、キリストから使徒たちに委ねられた宣教という使命、使徒たちの職務を受け継ぐ教会および後継者としての司教の重要性が強調されたとする。背景として、トウスカニアなどローマ近郊の司教の影響力が増大し、司教聖人の崇敬の高まりも指摘されており、発表者も同意する。ところが、「昇天」解釈に縛られたためか、キリストの球体や銘文などの「昇天」由来ではないモチーフ、同聖堂壁画との関係は等閑視され、11 世紀後半から 14 世紀にかけて、モンテカッシーノ修道院周辺の「昇天」がトウスカニアに影響を与えた、あるいは、10・11 世紀のオットー朝写本挿絵とローマ周辺のアプシス図像が混成したとの解釈がなされてきた。

本発表では、19・20 世紀の資料、壁画の調査に基づいて、アプシスの各モチーフや銘文を再検討し、「昇天」ではなく広義の顕現図像として、創造主キリストによる統治と十二使徒による地上の教会が表されることを明らかにする。さらに同聖堂北小アプシス「2 人のトウスカニア司教聖人に囲まれるキリスト」、聖人のメダイオンなど同聖堂の他の壁画と比較し、北小アプシスの着想源が 6 世紀のローマのサンティ・コスマ・エ・ダミアノ聖堂アプシスから広まった、キリストを使徒や聖人が囲む「献堂」図像であり、トウスカニア司教による司教職の正統性の主張がこめられた可能性を指摘する。